

保育と心理臨床

幼児教育学科 国 松 清 子

1. 始めに

ある地域の保健所において、10数年前より、1歳半検診、3歳児検診後の精密検診（発達クリニック）を続けてきている。次第に、地域の保育所とのつながりも生まれ、保育所における症例研修会といった名称で、保育と親子の問題を共に考える機会を持って、これも7,8年と続いてきている。当初、保育所側としては、自分の担当児童の発達の問題について、母親と同行して、検診場面にて同席しながら、情報を得るためであった。しかし、それに留まらず、児童の発達上の問題、母子関係の問題、保育上の問題等を、母子の退席後話し合うことが多くなった。さらに、このような機会を保育所全体で共有したい、との保育所側の要望もあって、筆者が保育所に出向いての職員全体とのカンファレンスへといつの間にか移行していったのである。これには、現在の保育事情の大きな変化と共に、親子の事情も大きく変化してきて、職員の対応もこれまでどうりでは立ち行かなくなってきた事情が大きい。このようにして、筆者はいつの間にか、保育の世界ともかかわってきていたわけで、こうした経験を今の段階でまとめておきたい、との考えから今回の執筆となった。筆者は、本学でも保育士の卵を養成する役割の末端にも座しているわけで、この機会に保育と心理臨床について考察を試みたい。

2. 今日の保育事情

世の中の変化は早く、年々そのスピードは加速しているようである。しかし、私達の生活はそれらに追いついているかといえば、そうではなく、これまでの生き方こそが大事と言われてみたり、これまでとはすっかり変わったのだから、これまでではいけない、と言われてたり、いわば混乱が生じているようにも見える。社会の常識も、社会システムも、様々に変化してしまったのに、私達の生活のある部分は変化しようにも変化できないまま、矛盾があらわである。その一つが出産、育児行為であろう。筆者の世代では、当時として、結婚するのは当たり前、結婚したなら出産と子育ても当然のこと、母親として最大限の犠牲をはらってしかるべく、といった社会的な考え方が大きく私達を圧倒していたので、それを引き受けるのが間違いのない生き方である、として生きてきたのが大多数であった。しかし、今日で

は、結婚は本人の自由、出産も生き方の一つ、仕事の選択も自由で、転職も当たり前、といったように、実に生き方は多様で、選べる時代へと大きく変化している。これらは、個人の自由を最大限生かした生き方として、これまでにはない、新しい生き方として間違いなく大切な変化であろう。しかし、選べる自由には個人の強い責任が伴っているわけで、そうした社会的背景はまだ、私達の社会には根付いていない。欧米での長い伝統に基づいた、個人への尊重の意識とはまだ格段の差があるのが現実である。従って、結婚したけど、出産したけど、子育て始めたけど、不満と不足だらけ、どうして私だけがこんなはめに陥らなければならないの、といった声が止まらなくなってしまっている。こうした親達と暮らしている子どもたちが保育所に通ってきて、様々な問題やトラブルをおこしてしまう。親と話したいと働きかけても、なかなかうまく行かない、当然困ってくるのは保育士たち専門家である。これまでなら当然と思っていたことが、そうはならない、一方では、保育者側のミスには大きく反応されてしまったり、又、子どもの様子も気になる現象が増えてきて、これらも又、保育の大きな問題となってくる、というわけで現任の保育士たちの困惑はこれまでと様子を変えてきているのは確かである。

特に保育の場で最近言われるのは、親達への対応である。これまでは、自分の子どもを見てもらっている、園や担任に協力するのが当然と考えている親達の信頼を得ている、と感じられて、子どもへの保育に集中できていたし、子どもたちに私達は何ができるのか、それだけ考えていたらよかったのに、今はそれだけでは保育は前へすすまない、といった保育の現場の声をよく聞く。保育士側も不満をつのらせてしまう恐れさえ生じているのである。これらは、ひるがえって、やがて子どもへの保育の質を変化させてしまうおそれもある、見過ごしのできない現象であろう。

3. 保育とそれを規定するものの大きな変化

今では、子どもの生活を取り巻く事情が一変している、と先に述べたが、離婚家庭が増加して、母子家庭であったり、父子家庭であったり、再婚による義父母の登場があったり、離婚後の生活を支えるための3世代同居家族になっていたり、或いは、平均的な核家族であったり、従来の3世代家族であったりと、と形態もさまざまである。つまり、こどもが育つ場所や状況の変化がある。

一方で、人の発達、つまり、生涯を通じての質的变化を分節的に、段階的にとらえる考え方は古代から今に一貫して存在していて、特に乳幼児期を特別と見る考え方はもはや私たちの共通の認識といえるだろう。たとえば、ポルトマンが人間の誕生後一年を他の哺乳動物のそれと全く異なった特別の意味を持った状態ととらえたのと同じように、いわば、人が人になるための特別の時期と考えられるのである。そして、その時期の発達課題は、時代を超え、社会を越えてすべての人類にとって「普遍」であり、「不変」であるのも間違いない。しかし、その発達を促進させていくための家族や社会、保育、教育は当然、時代や社会の特性によって規定される。このために、様々な矛盾や問題が生じてしまっているのである。子どもの必要としているのは変わらないのに、与える側が変化してしまった、ともいえるし、或いは、子どもの側にも以前にはなかったような異変？が起きてしまっているのかも知れない。今日盛んに言われるようになった発達障害というとらえ方も、育てる側の条件の変化が関与しているともいえ

るし、いや、子どもの胎内での発達にすでに異常があるのだとされる説など、社会や医学、その関連の学問の発達から、さらに複雑な様相を呈しているのが現代である。こうした変化の波は保育の世界にも当然のごとく影響は現れてきていて、今回はそれらを実際の事例に基づいて、描き出そうというわけである。

さらに言えば、今日保育所に地域の子育て家庭に対する育児支援を行うことを目的として実施されている、保育所併設型地域支援センターの存在がある。その役割を果たしているのはほとんどが保育士であるが、その任に対する資格や経験があいまいなまま実施されているために、職員の業務への戸惑いが見られている。橋本等の「保育所併設地域子育て支援センターの現状と課題」⁽¹⁾によれば、その活動は遊びやプログラムの提供を中心とする傾向がうかがえるものの、相談業務や他機関連携にも積極的である。しかし、それには、相談や他機関連携への新たな知識や技術の付加が必要と考える職員がほとんどであり、保育士が取り組んで行くとしても、課題が多いとされた。実際には、センターに期待された機能と現状との間にはズレがあるといつてよいようである。現状では保育士には大人（親側）を援助するための教育や知識、技術に対して再学習の機会があたえられるようなことはほとんどされていない。しかし、子どもの専門家として、子どもをよく知るものとして、その親を支援することは必要なことと筆者は考えている。ここに、専門的な知識と技術が必要なのは言うまでもない。親にとって、保育士は子どもを知る人として、最も身近で、援助を得やすい位置にいることも見逃せない。このために、保育士は子どもの専門家として機能するだけでなく、子どもに対して最も影響力を持つ親に対しても身近な援助者として位置づいてほしい、という願いを持つのである。村山の「地域社会の中の子どもと保育所・幼稚園の課題」⁽²⁾にも、母親の約8割が保育者からの何らかのアドバイスが欲しい、と保育者への期待度が高いことを報告している。また、保育者自身も親とゆっくり話し合える時間について、必要との答えは約8割前後であったと報告していて、今後の保育のあり方、子育て支援のあり方を方向づける重要な課題といえる、としている。

4. 保育園での症例研修会

以下は研修会での実際を、守秘義務のため、差しさわりのない程度に書き替えて呈示したい。

研修会の手順としては、毎回、症例を発表してくださる保育士から、詳しい報告文書をいただいている。日常の業務の中での作業であるから、決して楽なものではないが、熱意に支えられて取り組んでおられるので、筆者もできるだけ力添えをしたい、という共同の姿勢が開始当初からあった。それらの資料をもとにカンファレンスが始まり、提出した本人だけではなく、関連した人たちからの報告も加わり、共通理解を広げていく。筆者からは、さらに深く理解するための様々な質問や報告を促すことで、子どもや親への視点が集約されてきて、どうして？、何がおかしい？、わからない？受け入れられない？、など、担当者の抱えてきた疑問や苛立ち、不安などを取り上げ話し合っていく。最終的に、筆者からの、現時点で可能な判断や診断的見立て、保育上で可能な工夫や取り組み、親への姿勢や取り組み、等を伝え、まとめとする、といった進め方が通常である。一ケースにつき、30分から一時間ほどかけて

検討を加えるので、2時間程の研修会で毎回取り上げられるものは決して多くはないが、それだけに本
当に援助の必要なケースが取り上げられている。研修会の実施は年に2回～3回であるが、取り上げら
れるケースは1回限りのこともあるし、解決が困難でさらに複雑になっている場合などは繰り返し登場
する、ということもあった。

A君 4歳2ヶ月男児

家族は父、母、父方祖父、本人。父親は現在アルバイト、母親はパート保育士。

子どもの状況、朝登園しにくい。友達への言葉や態度が否定的。靴を履こうとしている友達に「おま
え、くつはくな」と言ったり、おもちゃの取り合いも多く、トラブルが目立つ。友達の身体にえぐる
ような引っかき傷を負わせてしまう。母親の連絡ノートでは「父母と本人の3人で〇〇しました」と
いう内容がほとんどであるが、本人は母親を怖がっているように見える。お迎えの時、ビクッとした
り、喜んでいる様子がない。

カンファレンス

進級直後の新しいクラスに変わった時は荒れていたようで、イライラしていた。他児に意地悪をした
り、乱暴が目立った。一方では、保育士の顔を良く見ていて、気にはしている。そうした時、チッ
クも出現する。時にはやさしい思いやりを見せることもあった。今もカッとなりやすい。友達に対し
て何か厳格に決めていることがあるようだ。それで、トラブルになっている。

母親はいつもいいことしか書いてこなかったように思う。本人がトラブルを起こした時は報告をしな
ければならず、そうした時も一応はきちんと謝られたりするが、後で、他の親と話し合っていて、
「園でよくない言葉を覚えてくる」などと園への不満をもらしている、と聞いた。なかなか、母親と
率直に話し合えていないまま経過している。保育士としては、子どもの母親への態度やクラスでの荒
れた様子など、率直に話し合いたいと思っているが、効を奏していないことに苛立っている。子ども
については、最近はやさしい一面が見えたので、それは大きく取り上げてS君のクラスの中のイメー
ジを変えていくチャンスとしたい。

筆者からは、本人はおそらく自分でも自分をコントロールできなくて、しんどい思いを持っているに
違いないので、そうした時は大人からの叱責を予想して収縮しているだろう。悪い行動には叱責は必
ず必要だが、さらに、自分でもこうした行為をつらく思っているのではないかと、と本人のコントロ
ールの難しさや危うさを保育士も気づいていることを伝えて、支えようとする人のいることを折りに触
れて伝えるように助言。母親へは、個別的な対応が必要な人として取り組んだほうがいいだろう。話
し合いのための別な時間を用意するとか、ノートを使って、本人に対する愚痴や夫を含めた生活の不
満なども聞いたり、ノートへもそうしたことが書けるようになると母親の今のかたくな態度も変化
が現れるかも知れない、急がないで、取り組んでみようと提案。

B君 4歳8ヶ月男児

母親と本人の二人暮らし。生活保護を需給。離婚した父親とは一緒に会う機会を持っている。母親は、
現在資格を取るために勉強をしているが、そのために生活が昼夜逆転となり、本人も朝起きられず、登

園が非常に遅くなる。お迎えは、近くに住む母方祖母に任せていることが多い。

B君は、園では入園以来ようやく慣れて友達と遊べるようになったが、新しいことにはなかなか馴染もうとはしない。今までほとんど、外で遊んだ経験がなくケガに敏感。すり傷程度で休んでしまうこともある。一方、園ではこけたり、ケガをしても泣くことはなく、声を上げたことがない。

母親は、精神的な面で不安定な様子で、保育士とは話すが、他の親とは全くできない。子どもについても、「今は考えられない」と言い切って、自分のことで精一杯な様子と見られた。子どもの爪が伸びたままだったり、虫歯もひどいけれど歯医者に行かないし、毎日の持ち物も用意できていない、など十分にかかわれていない。

カンファレンス

母親についての関係機関からの報告では、産後のマタニティブルーからの発症らしく、母親の入院歴が2回、実弟も入院中、とのことで、家族的な負因が考えられるような事態。管理職等、主に電話でかかわってきた職員からは、最初は場所がわからない、と何度も電話があったとか、現実感も危うい状態のこともあるらしい報告があった。さらに、少しのケガでも休ませてしまう、など母親の園生活に対する被害感の強さも浮き彫りとなった。今は資格を取る勉強に夢中であるが、子どもまで巻き込んでしまっており、このことを話し合うと、最近母親と一緒に何とか時間に遅れつつも登園してくようにはなった。タオルやエプロンは持たせているが、ノートはほとんど持参させていない。とにかく、園に来るように電話をしたり、迎えにいくようにして、今は毎日登園できている。B君はそれでも、友達の実似がふえて、後をついて回っている。保育への参加は大丈夫である。関心も大いにある。筆者からは、園として母親への対応は今のような援助が精一杯であろう、ことに察しがついたので、子どもの発達への不安もあり、発達相談への機会を利用することを勧める。地域の保健センターでの実施でもあり、母親にとって利用しやすいと思われた。そこでは子どもへの発達相談だけではなく母親へのカウンセリングの機会ともなっている。筆者が担当できるので、連携が行われやすいという条件もある。連絡はノートよりも電話や直接会った時を利用して、具体的な内容にしばって伝えていくように助言。毎日送迎を自分でできるように励ましていくことも大切である。園側としては、休ませないように、最大限配慮することが今は望ましい旨話し合った。母親には今はそれ以上は望まない、という配慮が求められる。実際はネグレクトの状態であるが。子どもへの保育については、様々な子どもとの生活が、家とは異なる健康な体験を保障するものであるから、B君については、できるだけ日常の保育を十分に経験できることが彼の発達を促進するものである旨説明をして、休まずに登園させて、日常保育を大切にするように担当者を励ます。

その後母親とB君は保健所にやってきて、発達相談を受けた。B君の発達に遅れも目立たず、比較的良好であったので、母親との面接を重点に行った。子どもは欲しくて産んだことや、職業のこと、今の付き合っている男性のことなど、まだ若い女性として人生の選択に迷っている段階にあって、自分自身のことで頭が一杯になってしまいやすいことなど、話し合った。子どもについては、保育所と協力してやっていきたい、と担当者や園への信頼がうかがえて、その後の見通しが立った。

Cちゃん6歳6ヶ月女児

母子家庭であり、母親の実家で暮らす。母、母方祖父母、母方叔母、姉（小学校2年）、本人の6人家族。母親の生まれ育った地域で友人や親族も多い。従って、本人の周りには家族も多く、周りの大人からよく世話をしてもらっている。友達とよく遊び、小さい子にも優しくできるが、些細なことでキレルことが多い。大声で泣いたり、叫んだり、物にあたったり、暴言をはく。一端そうになると気持ちの切り換えもできにくく、こじれると半日でもぐずっている。そのような時に家のことなどをもらす、例えば、「何でも大人が決めてしまう」といったことである。こうしたCちゃんの様子を母親に伝えても「家では何も変らないし、いつもどうりなんだけど」と淡々とした返事が返ってくるだけである。周りの家族に助けられていることで、母としてのかかわりが少ない、といった印象がある。

園としては、キレ易い子として、その時の本人の気持ちを受け止めながらも、物や人に当たらないでも自分の気持ちの伝え方があることや、我がままで愚図ったり、怒ったりするのはおかしいよ、と繰り返し伝えるようにしている。今後、就学に向けて、家庭とどのように連携を深めていくのか、又本人への理解についてどのように話し合っていけばよいか困惑している。

カンファレンス

卒園生である姉も小学校では問題を抱えていると聞いている。特に母親が参観に来ると怒り出して騒動を起こしたこともある。在園当時姉はいざという時、「おばあちゃん」といって泣いていたくらい、母親とはかかわりが薄い様子があった。本人は特に大人の顔色を読んで動いているような様子がある。今は字が読めるようになって、友達にいばっている。皆で取り組むような作業には「どうしてそんなのしなくてはいけないの」と不満が多い。家では物を一杯持っていて、それも自慢になる。家では好きなようにしているらしいが園ではそうはならず、キレルのではないかと心配。家では自分の作品はガラクタとして処分されてしまうらしい。最近は、落ち着くと「さっきはご免なさい」と謝ることはできるようになったが。母親は全く危機感もないようで、本人のこのような苛立ちにも全く気が付いていない。

筆者からは、残り少ない在園生活の間にできるだけ母親と話し合いを持つことを勧めた。母親は、就労しているとはいえ、フルタイムではないので時間には比較的余裕がある。子どもの世話は周りに頼むことはできても、子どもへの一貫した理解や関心、期待を抱くことができるのは親を置いてはいない旨伝えながら、母親としてのこうした気持ちを確認したり、動機を持てるように話し合ってみることを助言。子どもにとっては母親は中心人物であるはずであるが、この家庭ではそうはなっていないので、母親としては楽な反面、他の家族の存在に自信を失っているかも知れない。そのために、子どもの問題を取り上げられても、消極的になってしまっている可能性があるだろう。Cちゃんの苛立ちは、面倒をみてくれる大人には不自由していないが、自分を本当に理解してくれる人はいない、一貫して寄り添ってくれる人がいない、ことにあるのかも知れないから、こうした側面について母親と落ち着いた時間を持って話し合うことが今は求められている。その中で、姉も含めた、自分と子ども達の関係に思いが至るような話し合いを持ってほしい。その場合、母親を責めがちになりやすいので、そうではなく、母親として子どもの中心にはなれない痛みの部分をわかちあえるようにできれば、母親にとって、自分の非力さを理解する人として担当者への信頼を寄せる可能性があるのではと話し合

った

Dちゃん2歳5ヶ月女児

母子家庭であったが、最近になって再婚、間もなく母親にとっての第2子を出産予定。近くに住む、曾祖母に子育てや食事を手伝ってもらっている。母親は19歳という若さで、中学生時代には拒食症の既往歴がある。Dちゃんは自我がかなり強く、我がままで思いどおりにならないと毎日のように大泣きしている。お話や絵本も集中して聞くことができず、うろうろが目立つ。何をするにしても落ち着きがない。独占欲がかなり強い。母親のほうもまだ十代で、自身がまだ子どもである。かつての疾患と関係しているのか今も、人に言われたことなど、かなり気にしてしまう。間もなく出産、ということもあって、身体がしんどくてイライラしがちである。母親には、できるだけ色んな話をしたり、コミュニケーションを大事にして、こころを開いてくれるように心がけている。曾祖母が園に来られた時は、母親やDちゃんの様子を報告している。Dちゃんだけではなく、母親も一緒に園で子育てをしていく姿勢でいたい。

カンファレンス

Dちゃんの登園時間も遅いこともあり、園生活になかなか馴染めずに、機嫌が悪いと、物を投げたり、乱暴になる。すぐにけんかになるし、結局大人のそばにくっついていて。しかし、子ども達の様子は見ている。忘れ物も多いが、「ママが入れてくれないもの」とふくれる。簡単なこともできないで大泣きする。なくなったものを探すこともできないみたいで、ないない、というだけで探せない。彼女の園生活の不適応は母親の配慮にかけるものが強く影響しているのは確かである。朝早くに登園できれば、遊びにも最初からスタートできるので入っていくのも容易であろうし、遅れてくれば、もう皆は何かしら遊びが進行していてうまく入りそこなっていることもある。忘れ物も、園のものを貸しているからといって、お友達は自分の可愛いものを持参して使っているのを見ると、これも穏やかでいるはずもない、と理解できる。これは母親や曾祖母とも繰り返し話していった、Dちゃんの園生活がもっと楽しいものにならないとDちゃんも通園が苦しくなる、ことを話し合っていた。母親へは、出産が近いので、あまりの話はできないが、二人の母親になることについて、今までより自覚を求めるように話していきたい。今は保育士の話なら、比較的耳を貸すことはできている。他の母親同士の会話にビクビクしている様子がある。挨拶がやっとなので、できるだけ、間にたって、話ができるように気をつけたい。全く話をしたくない、といった拒否は全くない。

筆者からは、Dちゃんの理解について触れた。Dちゃんは物も探せないで、放置したり、あきらめる様子であったりするのは、おそらく、探すエネルギーも低いのではないかと、自分の大切なものはなくしたくないし、無くなれば必死で探して取り戻したい、というのが通常であろう。Dちゃんは、大切かそうではないか、との境目もまだ薄いのかも知れないし、自我が強い、というより、不安の方が強く、思いどおりにならないと、不安が大きくなる、と考えたほうがよいだろう、それだけ、まだ、もののあれこれや現象のあれこれを楽しむことが少なく、探索行動もほとんどないし、それよりも、自分の安心に必死になっているのではないかと。母親も当てにならないことを知っていて、楽しむよりも不満や不安が優勢である。そのために、落ち着いて取り組まなければならないものは、全くできな

いでいるし、それがわかるだけにますます、何か分からない不満や不安が増す、というのが現状であろう。

Dちゃんのできるレベル、集中が短くてもできるものから取り組ませて、何かができる、といった経験を幾度もさせてやるのが今は重要であろう。他の子どもへの関心も持っているようなので、配慮しつつ、遊べるような他子との間をつないで、接点を作ってやる、といった工夫も直ぐには成功しなくとも必要な援助であろう。

以上、上げておきたいケースは様々にあるものの、紙数に限りがあるのでここまでにとどめるが、子ども達は実に不可解な、およそ、発達にはそぐわない状況に放り込まれたまま、日常を生きているのがわかる。子どもの成長、発達に携わるものなら、これらは歯噛みしたくなるような現実だが、これらは何も特殊な事例ではなく、どこの園でも見かける今日ではありふれたケースではある。保育士たちにしても、この現実には振り回されつつも、何とか専門性を高めて取り組みたいと日夜苦勞をされている。筆者にしても、こうした取り組みは今後ますます重要になるに違いない、と考えている。

4. 保育実践と臨床の場

症例研修会で取り上げられてきたケースのいくつかを紹介してきたが、従来のように子どもだけを見ていれば、子どもが順当に育てば、保育士の役割は充分であった、とする、考え方はもはや保育の一部分にしかすぎない、といえるくらいに、役割はもっと複雑で、より専門性を必要とされてくる時代へと向かっている。必要とされるのは、やはり、臨床家としての視線、視点であろう。常に、目の前に子ども達がいて、常に臨床の場そのものに保育士は立っている。これは保育実践の中にある、臨床の場を見出すことであるが、論理的でかつ客観的であるよりは保育士としての経験や感受性、想像力、さらに直感を働かせることで見出されてくる、子どものいる世界であり、大人と子どもとの間で起きる世界のことである。ここから、生まれる子ども理解を取り上げて、又実践に生かす、の往復が保育士ならではの専門性をもたらすものとする。こうした実践例をいくつか挙げてみたい。岡田による「私の中のその子とかかわり方」⁽³⁾では＜子どもを見る＞ことの実践を問うている。子どもの何を見ているのか、見たものから何をj得ているのか、それが次ぎのかかわりにどのように影響しているのか、など「見る」作業について考察を試みている。そこから1人ひとりの子どもの「私の中のその子」を生み出して、又、次のかかわりへとつづいて、絶えず「私の中のその子」は刻々と修正されていく。このことはまさに臨床の場そのものである。恒川による「保育の場で生きられた遊びの意味を問う試み」⁽⁴⁾では1人の子どもとの関係の変化やそこから生じた遊びを保育の本質にからむ問題として考察している。遊びを臨床の場から理解しようとの試みである。宇田川による「自閉傾向のある子どもとのコミュニケーションの場を広げる」⁽⁵⁾では、自閉傾向のある児童をいかに理解するかという問いに、自分のありかを見出すために子どもとのかかわりを詳細に描き出そうと試みている。通常では理解しにくい世界が見出されていて、これも臨床的な感覚を持ってまとめられている一文である。須永による「友だちとの関係構築過程にお

ける[遊び志向]段階の可能性」⁽⁶⁾では昨今に見られる友達とのかかわり方に何らかのむずかしさを持つ子ども達の増加、という問題に焦点をあてて、一人のこどもの相手との関係を構築していく道筋をとらえようと試みた保育実践例である。いずれも、子どもの遊びを経時的に観察しながら、観察をしている自分との関係の変化や、そのことから生じる子どもの遊びの変化を取り上げ、一人の子どもの発達や育ちの生じているその世界を切り取り、それに参加している自分自身との関係やその変化をも見出して、人のこころのたち現れてくる時空間を描き出している。これらの取り組みに共通しているのは目の前で展開している場面の観察にある。それも、ただ傍観者として、行動を描き出す、といった外側だけの観察ではなく、同じ場で自分を関与させながらの観察であり、ここに臨床の場が生じる。つまり、自分自身をも同時に観察しながら、つまり、もう一つの自分を働かせての観察である。私達は日常意識してはいないが、何か自分が行動している時、それを同時に見ているもう一つの自分或いは、感じている自分があるので案外失敗しないで済んでいる。このもう1人の自分を意識して活動させることで、自分のいる状況を体験しつつ、刻々と起こっていることにもこころを動員して観察しようとすることで臨床の場が現れてくる。行動を見るだけではなく、行動を起こしているこころの道筋をも見ようとするわけで、情緒の表れや変化を特に見逃さないことが重要となる。このためには私達は自分の情緒にも開かれていることが必要である。職業的な仮面をつけたにこやかさを身につけただけでは、臨床とは無縁となるだろう。子どもによっては、そうした表面の後ろにあるものを感じて近寄らないこともある。保育士とは、相手と「人として」出会うことが職業であり、それが好き嫌いを乗り越えての相手への関心となって向けられるものである。

これらはもともととの素質にも影響されるが、職業的切磋琢磨によって、つまり、経験によって育てられるものでもある。自分のこころをも観察し、相手のこころも感じて行けるような体験がものをいうであろう。一般的な知識や技術にしろ、専門的な知識や技術にしろ、それだけでは役に立たないことも多いが、臨床の場での経験と重ねることができれば、様々に変化する現実や状況に身をおきつつも、必要な判断や見通しのもとに自分の行動もおおのずと決まってくる。この、自分の知っている知識や使える技術と今自分が経験している状況や人へ向けられた自分の関心や働きかけとを、いかに臨床的につなげて役立てていけるかは、やはり、日頃の意識的な訓練や経験の積み重ねを必要とする。そういった意味では、心理臨床と重なるものがあるだろう。

4. 観察レポートから見えるもの

筆者はその手始めとして、保育士の卵たる学生に、実習で出合った子どもの観察報告を毎回課している。選んだ理由、つまり、気になった理由と観察記録、さらにそれに対する自分なりのコメント、との3つに分けて書くのであるが、人に対する感性や文章をまとめる力量、観察力などに特徴が出てくる。このような観察する機会は、子ども理解を得るためにも、子どもを通して「人」を経験するためにも必要な作業として、筆者は位置づけていきたいと考えている。保育を目指す学生にも動機は様々で、単に子どもが可愛いから、といった答えが最も多いが、時に相手が子どもだから簡単、と誤解しているもの

や、幼少期の不遇を代償的に解決しようとして無意識に選んでいるもの（世話を受けたい、といった願望を相手、つまり子どもに投影して自分の要求を満たす行為）や、女性には取り組みやすい職業だから、と社会通念で選んでいるもの、何かを選ぶこともできなくて周囲の大人の意見に従った、など学生となる前の段階から、大きな違いがある。これらが入学後の取り組みの態度の違いとなって、授業を受ける態度に如実に表れてしまう。しかし、何かを決定しなければならない青年期にある彼らは動機は色々違って、学習がすすみ、実習に取り組むにつれてやはり、自分で何かを引き受けて生きることを意味を見出していく。つまり、心を動かされて、保育の世界に自分から入っていかうとしたのである。反対に、実習を経験して、自分には不向きと感じて、職業選択からはずしていくこともある。それはそれで、その学生にとって、自分の方向性の違いを知ったわけで貴重ではある。実習も果たせないこともあるが、これは能力的な問題かも知れないし、或いは「人」の世界に近づいて立ちすくんだかもしれない、どちらにしても止むをえないことである

以下に、レポートの幾つかを取り上げてみたい。

① 2回生Aさん

気になった理由

私に対する態度が日によって変っていったが、なぜか

観察報告

（前略）最初から、何か私のすることにあれこれ言っていたが、私にただ、かまって欲しいのかな、と思っていた。今思うと何か私に伝えたかったのでは思った。そのうちに、私に「おまえ」とか、「こいつ」とかと呼ぶのでちょっと嫌な気持ちになってしまった。実習最後の日になって、一緒に食べていた時「お姉ちゃん先生のこと、おまえとか言ったけど、本当はちゃうねんで」とポツリと言ったので、少しでもその子のことを嫌だと思ったことに対して後悔した。その子は困っている子どものことに一番早く気が付いて上げていたし、先生の質問にもよく答えていた。（後略）

この学生は、自分に向けられた子どもの気持ちがわからなくて、戸惑ってしまっているが、しかし、この子への関心は消えずに、わかろうとして、目を離さずにいたのが伝わってくる報告となっている。この子も自分が乱暴な行動を取っているにもかかわらず、ずっと関心を向けてくれていたのにちゃんと気が付いていて、最後の日に自分から実習生に接近している。学生の方も、子どものこの行動から、やっと、この子の表面だけでは分からない、この子の気持ちに気が付いていく。一つの出会いがあった、と言えるレポートとなっている。

② 2回生Bさん

気になった理由

その子は活発で甘えんぼうな子かと思っていたら、呼んでも無視したり、トイレはできるのに、1人ではトイレに行くことができない、からです。なぜ？

観察報告

（前略）始めは元気で可愛くて、自分の言いたいことははっきりと言う活発な子だと思っていました。

しかし、時々話しかけても無視をされたり、別の話をされたりして正直驚いてしまいました。また、同じ組の他の子どもたちはトイレに行きたくなると1人でトイレに行くのに、その子は「先生、トイレに行きたい、1人では行けない」と言ったのです。それが何度もあったので、少し心配になったのですが、実習最後の日には、「先生、トイレ1人で行けたよ」と話しかけてくれたので、うれしかったです。それと同時に、まだ1人ではトイレに行けない子に、どのような言葉かけや援助を行っていかねばいけないのかというのを、もっと考えなければいけない、と思いました。(後略)

この学生は、1人の子どもの豹変に驚かされながらも、ずっと付き合っ、このままでいいのかと心配もしている。この、心配している相手にこの子も、その心配にちゃんと反応して、答えを送っている。この子どもの行為に始めて気づかされたように、自分もこの子に何かできたはず、と自戒を込めて書いたレポートである。この子自身を理解することはできていないが、子どもの反応にこの学生が心を動かされたレポートとなっている。

③2回生Cさん

気になった理由

(前略) 朝でもお母さんと離れる事を嫌がったりすることもなく、とてもよい笑顔でお母さんを見送ります。でも、団体行動になるとよく、この子の行動が浮いて見えてきます。いつからか気になって、私も常に、何をしているのか、どんな行動をし始めるかを見るようになりました。(後略)

観察記録

皆が遊ぶブロックを出してあげると、友達はそのブロックで遊んでいますが、その子はブロックを入れるプラスチックのケースを押したり、中に入ったりして遊びます。機嫌よく、一人で積み木を使って自分を囲うように並べて遊んでいたのも、「大きなお家かな」と聞くと、「うん、先生も入る?」と言ってくれたので、入ると「今ね、入り口が固いから工事してる」と話してくれました。そして、さらに、サッカーが好きなことや、大きな虫はちょっとだけ怖い、とか、小さい弟がいることを教えてくれました。私はこんなに話してくれたことに驚きました。特に弟のことは面倒をみてあげていると自慢げにはなしていません。(中略) 昼食前にその子がいなくなっていたので探してみると、廊下に出た所でのんびりしていました。声をかけると、さっきとは違って、「ご飯食べたくない、いらない」最後には「あっち行っ」といって、何を言っても「いや」と外を向いてしまったので、かかわり過ぎたのかな、と思い少し離れてみました。昼食の用意もできて、先生が動こうとしないその子を引っ張って連れてきました。こういう時、無理やりにするしかないのかも知れないけど、何か何時も考えて、何かにいやになっているように見えます。この「あっち行っ」というのは時々ありました。先生は、そう言うけど本当はかかわって欲しい子だから、遠くからでも見ていてあげて、と言っていました。一度だけ、弟を連れて朝、お母さんと来ていて、弟にとっても優しくおもちゃで遊ばせてあげていました。これまでを見て、弟がいるから自分は頑張らないと、という思いで、無理をしているのかな、と感じました。かかわっていくうちに、「先生の名前なんて言うの」と聞いてくれるようになり、名前を覚えてくれました。何か、一歩進んだようでうれしく思いました。他にもどうしてかな、というのはたくさんあって、「家、帰りたくない」と言ったり、「先生、僕のこと嫌いやもん」と言うので、「先生

は〇〇君好きだけどな、好きやから一緒におるんやで」と応えると、少し考えてから、笑顔が見えました。マイナスに考えることが多いのか、家で我慢していることを思い出して嫌になってしまい、「あっち行け」となっているのか、そんな感じでした。もっと時間をかけてかかわって、理解していききたかった。忘れられない子になると思います。

子どもらしくない言動に驚きながらも、どうしてだろう、と一生懸命に考えながら、この子に寄り添おうと頑張っていたレポートになっている。人に対しても、自分に対してもネガティブに陥ってしまっている姿のこの子を何とか理解したいと、どこか痛みを感じながら寄り添っている様子がある。この子のところに勝手に侵入しないように配慮しながらも、寄り添い続けたことで、この子はいよいよ自分の名前を聞いてきて覚えてくれた、と、この学生も強く心を動かされているのが行間から伝わってきている。子どもの感情の起伏まで、感じ取っているようで、元々の感性の力を持ち合わせているのかもしれない。これが、もっと経験によって豊かに、研ぎ澄まされたものになれば、保育にとって、大切な戦力となるだろう。

以上、例に上げた学生のレポートに見られる子ども達の様子と、その背後にある家庭や親の姿はやはり、問題をはらんでいると推察されるものが多い。学生達は子どもといっただけで精一杯であったり、子どもの世界に分け入ることに懸命で、こうした問題にまで頭をめぐらせることはまだ困難である。やはり、経験を重ねながら見えてくるものに従って、学んでいくことができるのが、望ましい。それには、例に挙げた研修会のような現任訓練の機会が与えられ、新たな力を得ることが必要である。

5. まとめ

保育実践と心理臨床について、関連領域の職業であり、学問であって、両者に関連や関係があるのはすでに承知されていることであろう。筆者はスクールカウンセラーとして、学校教育との連携、協力の経験も10年になろうとしていて、関連領域、関連機関との関わり、連携は両方の立場からも有効である、との経験や実感を抱いている。保育実践との関連、関係は教育領域との関連、関係よりも、もっと密接で重なる部分がある、という実感を筆者は抱いている。それは、対象がまだあらゆる意味で発達の未分化な存在であるために、密接で重なる研究や実践を余儀なくされているからといえる。一方で、たった一人で存在する乳幼児はいない、といった意味で、常に回りにいる大人との関係や影響も同時に私たちは忘れてはいけない。この現象を子供の側から、或いは、大人の側からも同時にアプローチする、といった研究が求められる。今回は、連携や、関係についての試案をまとめたものである。

引用文献

- (1) 橋本真紀・扇田朋子・多田みゆき・藤井豊子・西村真美「保育所併設型地域支援センターの現状と課題」 保育学研究 第43巻 第一号 2005
- (2) 村山祐一 地域社会の中の子どもと保育所・幼稚園の課題 保育学研究第 第44巻 第一号 2006

- (3) 岡田たつみ 「私の中のその子」とのかかわり方 保育学研究第43巻 第2号 2005
- (4) 恒川直樹 保育の場で生きられた遊びの意味を問う試み 保育学研究 第43巻 第2号 2005
- (5) 宇田川久美子 自閉傾向のある子どもとのコミュニケーション的場を広げる 保育学研究 第1号 2005
- (6) 須長美紀 友達との関係構築過程における「遊び志向」段階の可能性 保育学研究 第43巻 第一号 2005

参考文献

- (1) 青木久子・間藤侑・河邊貴子 子ども理解とカウンセリングマインド 保育臨床の視点から 萌文書林 2001
- (2) 日本保育学会編 日本保育学会50周年記念出版 わが国における保育の課題と展望 世界文化社 1997
- (3) フレッド・パイン著 斉藤久美子 永田一郎監訳 臨床過程と発達① 岩崎学術出版社 1993
- (4) D. W. ウィニコット著 猪俣丈二訳 赤ちゃんはなぜ泣くの 星和書店 2000
- (5) D. W. ウィニコット著 成田善弘 根本真弓訳 赤ん坊と母親 岩崎学術出版社 1993
- (6) D. W. ウィニコット著 井原成男 斉藤和恵訳 両親に語る 岩崎学術出版社 1995
- (7) D. W. ウィニコット著 牛島定信監訳 館直彦 人間の本性 誠信書房 2004